

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：34317

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520135

研究課題名(和文) イギリス・モダニズム美学の再考 二〇世紀初頭の映画芸術への展開を追って

研究課題名(英文) Reconsidering the Aesthetics of English Modernism: the direction of film art in the early 20th century

研究代表者

前田 茂 (MAEDA, Shigeru)

京都精華大学・人文学部・准教授

研究者番号：80368042

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：1920年代を通じて、英国のモダニズム批評は、新しいメディアである映画を扱い始め、それにより、文学と絵画を前提とする以前の美学と批評論は、新たに練り直されねばならなかった。この練り直しは、1930年代に入りロシア由来のフォーマリズム映画批評が紹介され、以降の映画研究における主流となっていくにつれ、ほとんど無視されてきた。こうした傾向に抗して、本研究では英国の批評動向における上記の部分に光を当て、現代の批評理論へのその有効性を検討することを目指した。その結果、ヴァージニア・ウルフやウィンダム・ルイスらの言説の中に「時間感覚」と呼べるものが言及されるようになった事実を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Through the 1920s, British modernist critics began to deal in films as new media, and thus its aesthetics and critical methods had to be refined beyond their previous application to literature and painting. This refinement has been almost ignored under the presence of Russian formalistic film critics which has become the mainstream in successive film studies since the 1930s. Against this trend, we aim to shed light on this part of the critical movement and examine its activities for critical theory to day. As a result, we clarified that there had been the references to what should have been called "temporal sentiment" in critical discourses of Virginia Woolf, Wyndham Lewis and so forth.

研究分野：美学・美術史

科研費の分科・細目：美学

キーワード：国際研究者交流 イギリス 20世紀初頭 モダニズム 映画 美学 批評 メディア

1. 研究開始当初の背景

19世紀末から20世紀初頭にかけて英国で興ったいわゆる「モダニズム批評」の流れには、ロジャー・フライやクライヴ・ベルといった理論家だけでなく、その周辺に親和性と反発の度合いの差こそあれ、ヴァージニア・ウルフ、ヴァネッサ・ベル、ダンカン・グラント、ウィングダム・ルイス、ゴードン・クレイグら実作に携わった人物たちも含まれており、単純な言説上の一流行として捉えるにはあまりに広汎な拡がりをもって展開した。しかしながら20世紀後半に、クレメント・グリーンバーグに始まるフォーマリズム批評が批判的に検証されるようになると、とりわけクライヴ・ベルがその「significant form」の概念とともにフォーマリズム批評の起源の一つとして回顧的に位置づけられたため、これまで上記の拡がりをもっぱら絵画批評のための理論であると見なされる傾向にあった。

これまで、モダニズム批評に関しては、美術や音楽の領域で研究が進められてきたが、映像に関しては、エイゼンシュテインらフォーマリストの理論やアンドレ・バザンらリアリストの理論が取り上げられるばかりで、他のジャンルとの横断的検証が少なくとも日本においては為されてこなかった。最近、フェミニズムやカルチュラル・スタディーズの研究者がモダニズム期に活躍した女性アーティストを中心とした視覚文化論を展開させている。英国モダニズムに限定すれば、マギー・ハム(Maggie Humm, *Modernist Women and Visual Cultures*, Rutgers, 2003)やローラ・マーカス(Laura Markus, *The Tenth Muse: Writing about Cinema in the Modernist Period*, OUP Oxford, 2007)などが挙げられる。ハムもマーカスも、研究分担者・要真理子がモダニズムの小説家ヴァージニア・ウルフが1925年と26年に著した二つの映画論に注目し、その新奇性を論じているが(ABST, 2008)、要真理子はウルフの論が単に新しいだけでなく、同時代のロジャー・フライの美術批評や英国観念論の思想と密接に結びついて展開されていることを指摘していた。

2. 研究の目的

1910年代から1930年代にかけて、英国モダニズム批評は、新しいメディアである映画を扱うようになり、結果として、それまでの文学や絵画を中心とした言説を練り直し、その美学と批評の方法論を刷新する必要があったと思われる。こうした刷新は、1930年代にロシア・フォーマリズムが紹介され、やがてそれが映画批評の主流となるにつれ、忘れられていったように見える。しかしながら、上記の英国モダニズム批評の刷新に光を当て、それが今日の批評にどのように寄与することができるのかを検討することを本研究の目的とした。

研究代表者と研究分担者はまず、とりわけ1925年に設立されたロンドン映画協会に関する一次資料を収集、調査し、そこに関与した主要な英国知識人、すなわちバーナード・ショウ、H・G・ウェルズ、メイナード・ケインズ、さらに絵画のモダニズム批評において影響力のあったロジャー・フライとクライヴ・ベルらの言説を吟味する。このロンドン映画協会については、すでにスコット・マクドナルドによる先行研究(Scott MacDonald, *Cinema 16: documents toward a history of the film society*, Temple University Press, 2002)があるものの、これは基本的な歴史的資料の集約のみにとどまっている。映画に関する英国モダニズム批評の全体的な見取り図を描き出すためには、いっそう広い視野のもとで、この映画協会に関与した知識人、芸術家、批評家らによって書かれた関係資料を収集・考察することが必要である。

この見取り図を基礎として、まず研究分担者の要真理子が、英国モダニズムが映画を扱うようになった時期の、その美学並びに非表現後の変容を跡づけ、さらに研究代表者の前田茂が、他の同時代の映画批評との比較を通して、この英国モダニズムの映画批評が内包する独自性と今日性を吟味することを目指す。これらの作業は以下の2つの目的へと総合される。1)歴史的な一傾向としてのみならず具体的な映画作品や他の芸術ジャンルとの関係のもとで英国モダニズム批評の、これまで見過ごされてきた部分を明らかにすることによって、その多様性と有効性を明らかにすること。2)20世紀後半の言説においてすでに時代遅れのものとしてきた英国モダニズム批評が、映画批評と美術批評全般に対していかなる寄与をなしているのかを明らかにすること。

以上の研究調査の成果によって、今日の批評理論に新たな見通しを示唆することを目指す。

3. 研究の方法

本研究課題には研究代表者・前田茂と研究分担者・要真理子の2名で取り組んだ。英国モダニズムの映画批評に特有の美学と批評言語について、前者はその抽出ならびに他の主要な映画批評との比較・検討作業を担当し、後者はそれをモダニズム全体の中に位置づける作業を担当した。

平成23年度においては主に研究範囲の確定とそれに応じた収集すべき資料のリスト化を行いつつ、国内における一次資料の収集を進めた。主な調査機関としては、国立民族学博物館、大阪市立大学学術情報総合センター、立命館大学附属図書館、国立国会図書館が挙げられる。

平成24年度は主に海外にのみ所蔵されている一次資料の収集を行うとともに、収集した資料のデータベース化の作業を本格化させた。主な調査機関としては、The British

Library, The British Film Institute (以上、ロンドン、英国)、ケンブリッジ大学附属図書館、キングズ・カレッジ附属モダン・アーカイブ・センター、チャーチル・カレッジ(以上、ケンブリッジ、英国)、イースト・アングリア大学附属図書館、セインズベリー視覚芸術研究所(以上、ノリッジ、英国)が挙げられる。また当年度は、研究代表者ならびに研究分担者が、以下の海外研究機関で開催された学会・研究会発表にて研究成果の中間報告を行った。アヴェイロ大学(アヴェイロ、ポルトガル)、ゲルマン国立博物館(ニュルンベルク、ドイツ)、ロンドン大学ゴールド・スミスカレッジ(ロンドン、英国)。

本研究の最終年度である平成 25 年度は研究代表者と研究分担者の連携をいっそう密にして調査を実施した。主な海外調査機関としては、The British Library, The British Film Institute (以上、ロンドン、英国)、イースト・アングリア大学人文学部および附属図書館、セインズベリー視覚芸術研究所、セインズベリー日本芸術文化研究所(以上、ノリッジ、英国)、ブライトン大学(以上、ブライトン、英国)、モンクスハウス、チャールストン・アーカイブ(以上、英国国内)が挙げられる。また、主な国内調査機関としては、国立国会図書館、大阪府立図書館、早稲田大学演劇博物館が挙げられる。さらに研究代表者ならびに研究分担者が、以下の海外研究機関で研究成果発表を行った。イースト・アングリア大学(ノリッジ、英国)、ヤギェウォ大学(クラクフ、ポーランド)。また国内において、英国から研究者を招聘して、本科研課題をテーマとする研究会を行った(大阪大学)。

上述のプロセスと並行して、研究代表者・分担者は研究機関終了後に出版を検討しているローラ・マーカスによる先行研究『The Tenth Muse』の翻訳を進めている。

4. 研究成果

平成 23 年度の調査を通じて、英国モダニズムの言説における変化が、映画との関連で生じる時期が、1920 年代、とりわけその後半であること、そして当初の推測どおり、この変化は 1930 年代に入りロシア由来のフォーマリズム映画批評が紹介されるにつれ映画批評とモダニズムの言説における傍流となっていた事実が明らかになった。

この見通しの中で、ロンドン映画協会の上演プログラム、またこの協会の主要創設者の一人であるイヴオール・モンタギューの自伝『末息子 自伝的スケッチ』(Ivor Montague, *THE YOUNGEST SON Autobiographical Sketches*, Lawrence & Wishart, London, 1970)ならびにアイリス・バリーによる当時大きな影響力のあった映画批評書『映画を見に行こう』(Iris Barry, *Let's go to the Movies*, Arno Press & The New York Times, 1972)、映画雑誌『Cinema Quarterly』なら

びに『Close Up』ほか、当時の新聞雑誌に掲載された本研究に関わる知識人の映画批評のフォトコピー、1920 年代に英国にて上映された映画作品など、国内外の一次資料を収集し、その読解と分析を行った。

結果、とりわけロンドン映画協会の活動が始まる直前の時期から、雑誌『Cinema Quarterly』ならびに『Close Up』の創刊直前の時期にかけて、ヴァ・ジニア・ウルフによる 1925 年から 1926 年にかけての映画論「The Cinema」(「The Movies and Reality」)やウィングダム・ルイスの 1927 年の著作『Time and Western Man』といった言説の中に「時間感覚」と呼べるものが言及されるようになった事実が明らかになった。

以上の研究結果の中間発表として、研究代表者と研究分担者は、海外での国際学会ならびに大学での招へい講義で海外の研究者に向けて発表してきた。また、本研究の最終的な成果は、冊子媒体にまとめて刊行するだけでなく、その途中経過についても申請者が所属する学会(美学会、映像学会、意匠学会、国際美学会議)において逐次発表していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

ジャレ・エルツェン著 / 要真理子訳「美学か美か：自然と芸術における形式と意味」『立命館言語文化研究』25 巻 1 号、2013 年、1-8 ページ。

Mariko Kaname, “Remarks on ‘Emptiness’ or ‘Intervals’ in Painting: Modernism and Orientalism” The challenge of the object: 33rd congress of the International Committee of the History of Art/ CIHA 2012, Nürnberg, Germanisches Nationalmuseum, 2013, pp.1287-1290 (査読有)。

クリスティーナ・ヴィルコシェフスカ著 / 要真理子訳「風景と環境」『立命館言語文化研究』24 巻 3 号、2013 年、79-88 ページ。

Shigeru Maeda, ‘How to estimate children’s creativities authentically in “Artistic Workshop”?’ , *Proceedings of 2nd International Conference of Art, Illustration and Visual Culture in Infant and Primary Education*, 2012, pp.147-152 (査読有)。

Mariko Kaname, ‘Considering

Education of Children's Drawings in the 19th century to 20th century in England', *Proceedings of 2nd International Conference of Art, Illustration and Visual Culture in Infant and Primary Education*, 2012, pp.153-157 (査読有).

Mariko Kaname, Shigeru Maeda, 'Considering Aesthetic Communication Mediated by Images: the Case of "Remoscope"', 『国際版美学 *Aesthetics*』, 2011, pp.106-115 (査読有).

[学会発表](計 15 件)

前田茂、「マンガにおける間」BEER 展ミニシンポジウム「芸術における間」(招待講演) 2013 年 11 月 30 日、イロリムラプチホール。

ポール・エドワーズ、前田茂、要真理子「ウィンダム・ルイス『時間と西洋人』(Considering Wyndham Lewis's "Time and Western Man")」科学研費基盤(C)講演、2013 年 10 月 21 日、大阪大学。

要真理子、「イギリスモダニズムに見る都市の風景」国際フォーラム「風景のヴァンギャルド、風景のポストモダン」(招待講演) 2013 年 10 月 19 日、立命館大学。

Shigeru Maeda, Mariko Kaname, "Cinema as Aesthetic Leveller: Modernist Literature, Modern Epistemology and Japanese Sensibility", World Art Research Seminar(招待講演), Sep. 4th, 2013, University of East Anglia, UK.

Shigeru Maeda, "'Pilgrimages' to Scenes from Anime: Beyond the Consumption of Mass Culture", 19th International Congress of Aesthetics, Jul. 23rd, 2013, Jagiellonian University, Poland.

Mariko Kaname, "Bloomsbury's vision: considering 'The Cinema (1926)' by Virginia Woolf", 19th International Congress of Aesthetics, Jul. 24th, 2013, Jagiellonian University, Poland.

Mariko Kaname, "Considering How to Represent an Aesthetic Attitude toward Nature", The 2nd Symposium on SHIZENGAKU (招待講演), Mar. 1st,

2013, Goldsmiths, University of London, UK

前田茂、「風景の認識から実践へ 現象学的美学を参照しつつ」第 3 回「21 世紀の風景論」研究会、2013 年 1 月 31 日、立命館大学。

要真理子、「自然に対する美意識の表象化をめぐって」『SHIZENGAKU』第一回シンポジウム(招待講演) 2012 年 8 月 11 日、滋賀県立近代美術館

Shigeru Maeda, "How to estimate children's creativities authentically in 'Artistic Workshop'?", 2nd International Conference of Art, Illustration and Visual Culture in Infant and Primary Education, Jul. 25th, 2012, Aveiro University, Portugal.

Mariko Kaname, "Considering Education of Children's Drawings in the 19th century to 20th century in England", 2nd International Conference of Art, Jul. 25th, 2012, Aveiro University, Portugal.

Mariko Kaname, "Remarks on 'Emptiness' or 'Intervals' in Painting: Modernism and Orientalism", 33rd Conference of the International Committee of the History of Arts, Jul. 19th, 2012, Nationalmuseum Nurnberg, Germany.

前田茂、要真理子、「映像を介した感性的コミュニケーションの事例研究：remoscope の場合」第一回知識・芸術・文化情報学研究会、2012 年 1 月 21 日、立命館大学。

要真理子、「Laura Ashley archive room ブルームズベリー・コレクション 1987 を中心に」アート・ドキュメンテーション学会第 4 回秋季研究会、2011 年 11 月 26 日、東京大学。

前田茂、「性表現の猥褻さをめぐる芸術とポピュラーカルチャーの相違」第 2 回ポピュラーカルチャー研究会シンポジウム、2011 年 5 月 21 日、京都精華大学。

[図書](計 6 件)

前田茂、要真理子他『自然の知覚 風景の構築。グローバル・パースペクティブ』、三元社、2014 年、311 ページ。

()

研究者番号：

要真理子、稲賀繁美他『自然学 | 来るべき美学のために』、ナカニシヤ出版、2014年、194 ページ。

スチュアート・ホール著 / 前田茂訳『イメージと意味の本 記号を読み解くトレーニングブック』フィルムアート社、2013年、200 ページ。

前田茂、要真理子『イメージ(下) イメージと私たち』、ナカニシヤ出版、2012年、126 ページ。

前田茂、要真理子『イメージ(上) イメージとは何か』、ナカニシヤ出版、2011年、122 ページ。

神林恒道、要真理子他訳『韓国近代美術の百年』三元社、2011年、319 ページ。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前田 茂 (MAEDA, Shigeru)
京都精華大学・人文学部・准教授
研究者番号：80368042

(2) 研究分担者

要 真理子 (KANAME, Mariko)
大阪大学・コミュニケーションデザイン・センター・准教授
研究者番号：40420426

(3) 連携研究者